通信第三十四号　蓮如上人作、『（伝染病の時）のおさま』をご縁に

　延徳四年（一四九二年）六月、今から約五百三十年前、蓮如上人七十七才のです。伝染病がおこり多くの死者がでました。現代のような医療技術があったわけでなく、当然テレビやラジオ、電話などもないころです。蓮如上人のもとへご門徒さん方が病にかかったことや、死んだことなどが伝えられて来ます。得体のしれない不安や恐怖心におびえ動揺していることなどの報告も受けます。また、自身もいつ感染し死ぬかもしれないという中でご門徒さん方へあてられたお文さまです。原文でなく、意訳してみました。

このごろ、多くの人びとが伝染病にかかって亡くなっています。これは伝染病が原因で死ぬのではなく、伝染病を縁として死んだのであります。生まれたことは死ぬというさだめであればよくよく考えてみると、さほど驚くべきことではありません。しかしながら、死なずに済むいのちが伝染病のために死んでしまったと人間は考えてしまうのです。やり場のないいらだちや悲しみにさいなまれる中、ただ伝染病が終わるのを待つほかないと思うのも当然であります。しかし、ただ時が過ぎるのを待つというだけでは本当の救いになりません。この難事をご縁に日ごろ聞いて来た阿弥陀如来の教えを深く頂く時であります。

罪の深きまま、煩悩まみれのままに救われていくのは念仏のほかにありません。人間の思い考えはすべて迷いであります。人間は迷うのが本能であり、仏は救うのが本能であります。だから阿弥陀仏をたのむほか人間の本当の救いはないのであります。ここに目覚めて、「南無阿弥陀仏」と弥陀をたのむところに必ず救いがあるのです。

その願を心に受けて「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と弥陀をたのめば、自分の考えではあり得ない法の事実が見えてきます。そうなってみると自分のあてにならない思いや考えをかたくなに信じていたことに目が覚まされます。これまで苦しく、暗かったはずだと知らされます。自然に心が広々として安らぎ、こんなにたいことだったのかと仏様にお礼せずおれなくなります。

どうしてよいかわからず右往左往していたが、このたびのご縁で生死を超えたご本願をたのむことになれた。我欲を満たすのでない、生死を超えた真実の光明の本願名号に出会えた。これこそ人間として生まれた甲斐があった。この光明は衰えない、消えない。これひとえにみ仏様のご恩、ご本願の計り知れないご恩徳と知らされ、おもわず、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と申さずにおれません。この事実を仏恩報謝の念仏というのです。ありがたいですよ、もったいないですよ　　　　　　　　　　　　　　　　　聖典八二七頁

　原文のままではわかりかねるので、直訳せずにずいぶん増減させていただきました。逸脱していたらご容赦ください。

親鸞様はご流罪などの苦難を通られてお譬えをもって教えて下さっています。

　人間の計らいから出た世間道は、つねに生は良い、死は悪いという人間の我執のはからいから出ることなく流転をくり返してゆく。出世間道は世間道の三界（我欲の世界、物形の世界、思想や学問、自分の考え、感性という計らいの世界）を超えた道である。如来の家に生れた喜びは、世間道では想像できない。それまでの喜びは二、三滴の水の如く、苦しみは広大な海ように思われていたことが大逆転して、苦しみが二，三滴となり、苦の消された光明の世界は海のように広大である。

聖典一六二頁

私は娘が中学生で赤ちゃんが産れた前後、毎日が立っておれないような苦しい日々がつづきました。朝目が覚めて数秒して、言葉が心に出た瞬間、心臓がどきどきして、身体が締め付けられる思いにかられました。善し悪しの比較の世界からでる言葉で苦しみ、憎しみ、恐怖心に数年間悩まされました。

南無阿弥陀仏は形の無い光が、善し悪しの言葉で苦しむ人間に、言葉となって下さった光明であり、言葉の仏さまであります。仏のみがとどくと、善し悪しの迷い心が消されます。息子の統合失調症の病気のときも「念仏申せてか」というお励ましに涙が出つつ、一日一日を送らせて頂きました。そのはてに、母とのご因縁で「弥陀の御袖にひしとたのみまいらするおもいをなして」というお文様のお言葉が光のおとして私の心に届いてくださったのです。「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と「阿弥陀仏さまをたのむ」ということが私に発起されたのであります。そこを起点に私の人生において「仏をたのむこと、すなわち南無阿弥陀仏と申すことが光りをたのむこと、阿弥陀仏に帰依すること」にならされました。つたない私の体験を通し、三人の奥様に先立たれた深い悲しみを経て、念仏の光によって立ち上がられた蓮如さまは、人間の力ではどうにもならない疫病の中で苦悩する同行さん方に、光の智慧の念仏に出遇ってほしい、そこから御恩報謝の生活を始めてほしいとの願いをもたれて、この「疫癘の御文」を書かずにおれなかったのではないかと拝察させていただくことであります。

先日の輪読会（三人）での発言です。「ニュースを見ていて試されている気がします。コンサートやオリンピックやお花見などもいいのですが、のよりどころではありません。このたびの、コロナウイルスのためにいろいろなことが延期や中止になる中で、真実のよりどころは何なのかと問われている気がします」。この発言を聞いて私は「小さな灯り」という紙芝居を思い出しました。

ある村の夏の夜のことです。お釈迦様を家に招くために、それぞれの家の前にあかりをします。金持ちの家は当然大きな灯ろうを用意します。それぞれお釈迦様を招くために趣向をこらします。ところがある貧しい家にはお金がありません。苦心の末、その家の少女は長く伸ばした自慢の髪を切ってお金に変えました。すると小さなローソクが一本だけ買えました。夜、家々に灯りがともされました。ところがその夜にかぎって大風が吹いたのです。灯りはことごとく消えてしまいました。そして少女の家の小さなローソク一本だけが消えなかったのです。お釈迦様はその家に入られました。人情でもよくわかるおたとえの紙芝居です。「貧者の一灯」ともいわれています。お盆の灯ろうの起源とも聞いたことがあります。このたびよく味わわされるとこれは深いお譬えであります。

私たちもいくら生活が順調にすすみ不自由なく暮らしていたとしても、余命三か月と死を宣告されたらオリンピックも花見もお金も健康も、さらには宗教を大事にしているという思いさえことごとく色あせてしまいます。そこに消えない灯があるのでしょうか。

大石先生はガンを宣告されても、死ぬ一息までご本願に生きられました。本願のいのちが先生のいのちとなっているように見せられました。足がむくんだら靴を買い替えられ、舌を半分切除されても法話されました。ベットに寝ておられてもご本願に生ききられました。

「念仏の息絶えましまし終わりぬ」といわれている親鸞様と同じ終わり方を感じさせていただきました。その本願念仏は死んでいません。

日ごろ大事にして来たことが、大きな事件が次々と起こった時どうなるか。友だちや、お金や地位や学問、家族等々みな崩れていきます。最後には一人になります。これは誰もが受ける事実であります。五年先の日本は、六五才以上の認知症が七〇〇万人にのぼると予想されています。その前に新型コロナウイルスにかかって明日死ぬかもしれません。何をよりどころに生活しているのかが問われます。

老、病、死でも消えぬ灯りがあるのでしょうか。釈尊が若いとき、心が空しく、ふさがり、憂うつとなりました。父王は心配されて、立派な宮殿や美女をそろえたのですが、若きお釈迦様の心は晴れませんでした。そこで、王宮から外に出て見ました。東の門から出て衰えた老人に遇いました。自分も老いると知らされました。　南の門から出ると病人に遇いました。自分も病気をすると知らされます。　西の門から出ると葬儀の列に遇います。自分も必ず死ぬことをあらためてしらされました。何も救いは無かったのです。北の門からでたとき、老いて崇高な人（生老病死を超えた人）を見たのです。自分はああなりたいと発心されたのです。

親鸞さまは

無明長夜の（灯台）なり

　　　くらしとかなしむな

　　　生死大海のなり

　　　罪障おもしとなげかざれ

　　智慧の念仏うることは（闇を破り光の方向に転じて下さるおはたらき）

　　　法蔵願力のなせるなり（私の苦しみ悩みの中で御思案、ご修行して下さる願力）

　　　信心（仏様の心）の智慧なかりせば

　　　いかでか涅槃をさとらまし

　　如来の作願をたずぬれば

　　　　苦悩の有情（人間）をすてずして

　　　　廻向を首としたまいて

　　　　大悲心（南無阿弥陀仏）をば成就せり　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　聖典五〇三頁

　よほどのことがないかぎり如来をたのむということは人間にはおこりません。道を得て、本願に生きる人に出会い、長く苦しみが続いてもお育てを受け続けて行くということが大事であります。なぜなら「弥陀をたのむ」ということが人間からは不可能であり、如来のご廻向であるからです。少々の人間の力で克服できると思い上がっている間はあり得ないことなのですから。

蓮如上人が「私が命を捨てよといえば捨てる人はある。ところが信心を得よといっても得られる人がいない」と仰せられたと言います。他力回向の信心、他力回向の念仏は人間の肉体の命を捨てても解決のつくことではないのです。

　よくいのちが大事であると聞きます。それを前提にして政治や教育、まして経済がなされています。

星野富弘（事故のために首から下が動かなくなった方）さんの有名な詩に

　　　いのちが一番大切だと

　　　思っていたころ

　　　生きるのが苦しかった

　　　いのちより大切なものが

　　　あると知った日

　　　生きているのが嬉しかった

　この詩は蓮如上人のさまに通ずる心があります。このお言葉を寺の掲示板に書いていたら大石先生が大変喜ばれました。

　不安な日々を送られている中で聞いたことがふと浮かんできます。

　心配はいらんというための

　心配である

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　松原　現栓先生

　いろいろなことがありますが

　なにもないということなのです

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　坂木　恵定先生

　　人間は迷うが本能

　　仏は救うが本能

　　南無阿弥陀仏とたのむところに

　　人間に仏のが咲く

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常　照

　家に閉ざされる時間が長くなります。改めて勤行のある生活のご恩を身に知らされます。たとえば朝夕六時の勤行と決めて、声を出して読経。そのあと仏書などの音読をされたり、「歎異抄」などの写経をされたりすると有難いです。私のさせて頂いて来たことです。縦に流れる聖人様や先生方、ご本願のに加えれ、横には同行さん方や天地自然、その奥に生きている無辺のご本願の光との一体感が感じられて来ます。実感がない実感。わからないけど明るくなっている。その日その場での新しいご本願のみ力を頂けます。

　三重県桑名市の伊藤たね子さんから頂いたお便りに

「自分なりの解釈ですが　つらい事やイヤな事をのり超える力を頂き、くじけず明日に向かって進む力を頂けるのが私の南無阿弥陀仏です。」

とあります。共感しお励ましをいただくことであります。ご縁のみなさま、お念仏に光明、み力を頂いて共に救われてまいりましょう。

　南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

令和二（二〇二〇）年四月五日

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常　照